

漁獲日誌にみられたシジミ貝桁網漁業における CPUE の変化

井戸本純一

1. 目的

資源管理の基礎資料として漁獲日誌によるシジミ漁業の実態調査を毎年実施している。変動が激しい近年の資源状況や台風 21 号の被害がシジミ漁業におよぼした影響を漁獲日誌から検証した。

2. 方法

平成 30 年度（2018 年 4 月～2019 年 3 月）は 4 漁協 16 名の漁業者を対象に漁獲日誌の記載を依頼した。なお、対象数は平成 27 年度までは 19 名、平成 29 年度までは 17 名であった。

3. 結果

平成 30 年度における対象漁業者の出漁回数は、平均 79.8 回で、最多は 140 回、最少は 21 回であった。各漁業者の 1 回あたりの平均操業時間は漁業者間の平均で 4.3 時間、1 回あたりの漁獲量は同じく 42.8kg であった。

漁獲日誌にもとづく月ごとの単位時間あたり漁獲量(CPUE)の経年推移を図 1 に示した。

セタシジミ漁の盛期は冬から春にかけてであるが、禁漁開けの 8 月から冬にかけては操業頻度が増加しても多くの年で CPUE は増大傾向を示した。これは、貝殻の成長が秋季に最も盛んになることから相対的な肥満度の低下にかかわらず個体の重量が増加すること、操業による湖底の耕耘効果によって漁獲効率が徐々に向上することなどが要因と考えられる。その後、漁期の終盤にかけては CPUE が低下する年が多く、資源の減少を示していると考えられる。

一方、平成 30 年度の CPUE の推移は、8 月には平年並みであったものの、10 月以降急激に低下した。これは、9 月に襲来した台風 21 号による湖底の荒廃によって多くの漁場で漁獲効率が著しく低下し、操業が集中した特定の漁場では短期間に資源が減少したことを示している。その後、漁場の回復にともなって CPUE は上昇しているが、操業頻度はまだ回復していない。

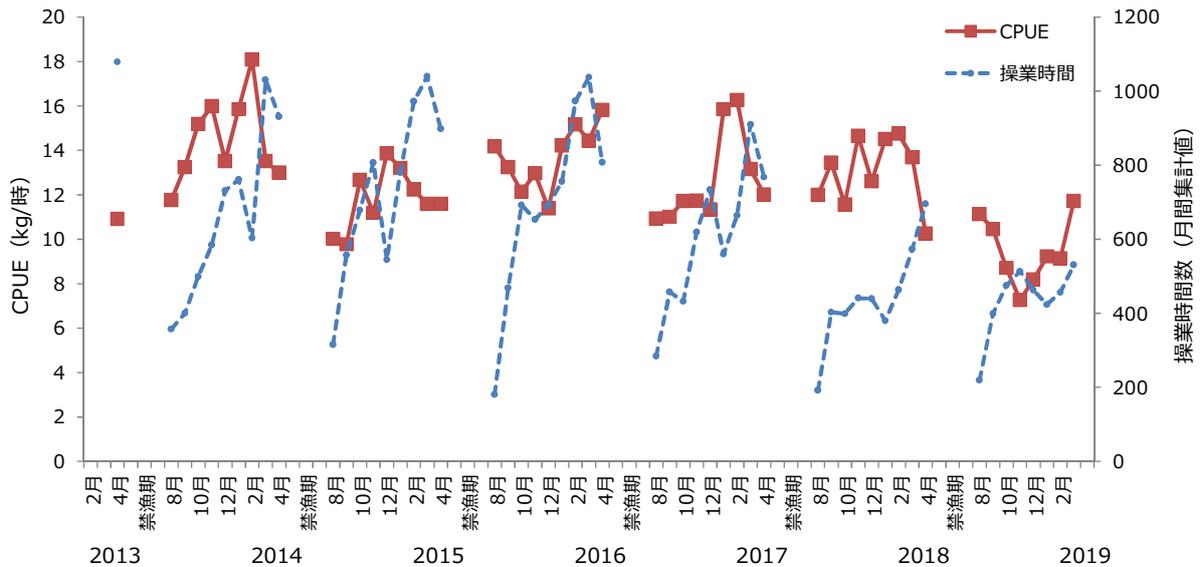


図 1 漁獲日誌による 1 時間あたりシジミ漁獲量の月別平均値とのべ操業時間の推移。

本報告は滋賀県資源管理協議会からの調査委託事業の成果の一部である。